

妙顯寺

[茶とアート]

妙顯寺は 1321 年に創建され、その 13 年後に朝廷から布教の勅旨を賜った、京都で最も古く、そして最も影響力のある日蓮宗寺院のひとつです。この寺院は、敷地内に点在する小さいながらも手入れの行き届いた庭園が特に有名で、500 円の拝観料を支払えばそのすべてを見学することができます。

「四海唱導の庭」は朝廷の使いのためのみに開かれる勅使門の前にあります。この庭園は、日蓮宗の教えの根底をなし、現世および来世における救済の可能性を説く「法華経」を表現するために設計されました。庭園の左側に積み上げられた 3 つの石は、水が海へと広がって流れる滝を表し、海は白砂で表現されています。これは法華経が世界中に広まることを象徴しています。

「孟宗竹の坪庭」は深緑の苔から生える竹がその主役です。竹は毎年伐採されて、再び成長することが許され、絶えず変化する眺めを作り出しています。この庭園のつくりは、名絵師の尾形光琳（1658～1716 年）が描き、この寺院に所蔵されている一連の絵画が元になっていると考えられています。

2 本のたくましい松の木が中央にある「光琳曲水の庭」もまた、妙顯寺の檀家であった尾形光琳ゆかりの庭園です。「孟宗竹の坪庭」と同じ絵画を元にしたこの庭園は、寺を焼き尽くした 1788 年の大火で失われた、光琳自身が作ったとされる庭園の後にできました。

「五色椿と松の庭」には、その名にある 2 つの植物以外にも、カエデ、アジサイ、ユリ、その他さまざまな顕花植物があります。庭に降りる踏み石そばにある円形状のものは水琴窟といい、土でできた逆さまの陶器の甕の中を通して小さな水たまりに水滴が落ち、感覚を落ち着かせるという優しい水の音を響かせます。